

2020年12月13日(日)／説教者：國分美生

説教：「それでもクリスマスはやってくる」

聖書：マタイによる福音書2：13～23

世界で最初のクリスマスは、今日私たちが見るようなキラキラしたイメージからかけ離れています。喜ばしくも何か暗さも感じます。マタイはイエスの誕生について、旧約聖書から引用し、この非力な幼子が「神の約束が成就した人」であることを強調します。旧約のヨセフ物語・モーセ物語を連想させる意図もあったかもしれません。ですが、ヘロデ王がベツレヘムとその周辺の2歳以下の男の子たちの命をことごとく奪ったとの記述は、私たちに困惑させます。幸いに、このヘロデ王による虐殺は実際に起こったことではないようですが、この箇所を何も引つ掛かりを覚えず読むことは、一人のヒーローの誕生のためには犠牲が出るのも致し方ない、誰かを救うためにはほかのだれかに犠牲になってもらうしかない、と虐殺を肯定することになるのではないのでしょうか。

この時期、巷の「クリスマスおめでとう！」という声を聞きながら、「何がめでたいものか」と、悲しみや苦しみ胸につかえている人もあることでしょう。私たちについて振り返れば、3年前12月7日、緑ヶ丘保育園の屋根に米軍ヘリの落下物があり、直後、城間祥介先生を主の御元に送り…その後も多くの、共同体の仲間を天に送りました。新型コロナはこの社会や教会の在り方を問う衝撃的な出来事となりました。それぞれの課題や悩み事と日々向き合わなければなりません。毎年クリスマスからお正月にかけて、自死する方もぐんと増えます。寒く厳しい季節の中、路上生活者たちの命が気にかかります。「今年もいろいろあったけど、クリスマスを迎えられてよかった」と祝える人ばかりではありません。

しかしそのような人々のためにこそクリスマスはあります。18節で引用されているエレミヤ書31章15節以下は、「泣き止むがよい。目から涙をぬぐいなさい。あなたの苦しみは報いられる」「あなたの未来には希望がある、と主は言われる」と続いています。「何がめでたいものか」と、苦しんでいる者への主からの慰めと励ましです。喜びの裏にある、拭い去り切れない悲しみに、救い主が寄り添ってくださる事実です。

インマヌエル＝「神は我々とともにおられる」という主が、目に見える形ではっきりとそのことを示してくださった出来事がクリスマスです。この世の闇の中に、希望の光がやってきた。そしてそれはいつも一緒にいる。そのことを信じながら、この世に証していく私たち教会でありたい。(國分美生)